

テーマ	音楽Ⅲで取り組むジャンル融合バンドー表現力を育む授業作りを目指してー
発表内容	自由選択科目音楽Ⅲでの実践内容の紹介
発表者	佐川 淳

発表概要

同志社高校で高校3年生の自由選択科目として設置されている音楽Ⅲの受講生は、楽器演奏経験の程度、得意とする実践内容や読譜力の違いなど個々の差は大きいですが、総じて演奏実践にとても意欲的である。そんな個性豊かな受講生に対して授業担当者は、いかに生徒の潜在的な表現能力を伸ばすことができるかを長年課題としている。

発表の前半では、講座で取り組んでいる受講生による音楽賛美礼拝での演奏内容の変遷、コロナ禍における音楽の授業実践、またコロナによる制限が大幅に緩められた後の授業実践の変化なども紹介した。特にコロナ禍に始まり、現在も継続している音楽Ⅰでの作曲課題（DTM）は、音楽Ⅲ受講生にとって創作を比較的身近なものにしている。



発表の主題は、コロナ後に変化した音楽Ⅲでの賛美礼拝に向けた取り組みについてである。ディスカッションを経て受講生が決めた演奏曲を、各人の得意分野を生かした編成で演奏できるよう、アレンジを施して各パートの演奏内容を決めていく必要が生じるが、そのための編曲作業を1学期の「編曲・創作課題」と関連付け、受講生の創作力を反映させることにした。課題に向けて楽曲の構成やコード進行を分析し、コードとメロディーの関係の理解に努めたうえで、既存の楽曲には存在しないオリジナルのメロディーやフレーズ、対旋律を各自創作する。さらに、創作の途中経過やそれに対する教員のアドバイスを講座全体で共有することで、各受講生の創作内容が一層レベルアップした経緯を明かし、生徒が実際に発表した創作内容を動画により紹介した。楽譜を用意してから演奏実践に入っていた従来のスタイルを捨て、受講生が編曲を加えて作品を自分たちのものにしていくことで、受講生の演奏に対する姿勢が変化したと感じている。自分の演奏する音を他者の音との関係性の中で聴くようになり、「自分の表現したい音」を意識しながら演奏するようになったように思われる。

発表の終わりには、日常の礼拝を通して触れる音楽、自主的な活動としてのクラブ活動、有志メンバーで聖歌隊を構成する岩倉キャンパスクリスマスや、プロの演奏家を招いたチャペルコンサートなど、教科での学び以外の生徒の音楽との接点について触れ、それらが横断的に影響し合う可能性と、彼らの学びの広がり期待しているところで締めくくった。

質疑応答

Q. 楽譜に忠実に正しく演奏することと、「楽譜通りでなくても表現力がある」とされることとどちらが良
いのか、考えを聞かせてください。

A. そもそも楽譜で伝えられる情報には限りがあり、実際楽譜を読んで演奏する際には、楽譜には書かれていない情報を解釈する力が求められます。「表現力」で表されるものの多くは、音色や音のニュアンスなど楽譜に書けないです。作曲家の意図を汲み取るという意味で楽譜に忠実であることは大切ですが、表現を無視してただ音やリズムが書いてある通りに鳴らせるというのは「忠実に演奏する」とは言えません。

Q. 生徒をどのように評価されていますか

A. 課題を出す際には、生徒にはどういうところが評価のポイントになるのかは必ず伝えるようにしています。創作課題の場合、まずはコードとメロディーの関係を理解してオリジナルのフレーズが作り出せるか、というのが第一段階、その次に、創作したフレーズの展開や前後との関係性、どこを見せ場にしてメロディーをどのように構築するか、というのが第二段階、そして創作したものをイメージに合わせて表現できるか、という演奏能力も評価に反映させています。

Q. 賛美礼拝のように複数人で取り組む内容の場合、評価はどうなりますか。みんな一律の評価になるのでしょうか。

A. 高3生の評価は特にシビアなので、一つの学期の中で賛美礼拝のようにみんなで作り上げていく内容以外に個人課題を課して、個別の評価をつけられるようにしています。例えば創作課題は個別に評価する課題ですが、講座全体で演奏するという内容でも、グループ全体で作りたい音に対して、個人がどのような演奏をするのか、という視点で演奏を聴いています。また、自分だけが上手に演奏できれば良いのではなくて、他者の音を聴きながら演奏できるか、他者とどう協応、協同するのか、というところでも評価をしています。